



町史本文に書かれない歴史観

町史編さん委員 中村 修太郎(民俗担当)

私は民俗編の何章かを担当し、ムラ(集落)の発展や暮らし、民俗行事を中心に既刊『小坂町史』にあまり記述されなかったことを意識し、書いた。

ムラの歴史を探る上で、その地区に存在する「神社仏閣」の建立や由緒を調べることは、相応の史実を伝え、ムラ社会の変遷を解いて、集落の隆盛過程を知ることにつながる。それは史書編さんの常とう手段とも言え、史料として貴重な存在感が表れていると言えよう。そこで川上地区の「摺白野(すりうすの)神社」(旧川上神社)の由緒を事例に、「町史本文に書かれない歴史観」について述べてみたいと思う。

濁川集落の「摺白野神社」という杜(もり)に大明神が鎮座する。この由来は、室町時代後期に、鹿角中世42館(たて)の一つ「濁川館」の館主であった秋元左馬之助が、永禄10年(1567)に建立したと伝えている。

その頃の鹿角支配のすう勢は、①南部氏が陸奥入り：建武元年(1334)北畠家から鹿角郡を給(たま)う、②鹿角楯(館)攻防：建武3～4年(1336)大里城周辺における楯の三か所が比内浅利氏に奪われる、③秋田征伐：応永18年(1411)南部守行公(第13代)が鹿角領を奪還する、④秋田勢の侵攻：永禄9～10年(1566)秋田の安東氏が谷内城周辺の長牛、大賀峰らを討ちこれを奪う、⑤鹿角の奪還：永禄11年(1568)南部晴政公(第24代)が九戸政実の遊軍を得て秋田勢を撃破し、鹿角を南部領に復す。

このように、約220年間にわたって鹿角は、何度も支配が変転とした戦国乱世の真ただ中であつた。なぜ、左馬之助は祠堂(しどう)を建て、「大明神」を祭る必要があつたのか?。その理由は、村人への「求心力」の創造に他ならないのではないか。村人

の意向に左右されず、万一戦闘有事の際はムラの子女を守り、一方、兵役を駆り立てての反撃を挑んで、領地の安堵(ど)を図らねばならない。これら村人の理解を得るには、己より尊い天の「御加護」を求めて流布することを考えたに違いない。

祭られた「守護神」は何か?。左馬之助は武人であつたゆえんで、「金剛夜叉(やしや)明王」を崇拝したと伝えている。この神は、古代インドの神話由来で日本に伝わり、「戦勝祈願の仏」として信仰が成立。南北朝時代(1336)から広く武人たちに崇拝されたという。往時、左馬之助は仏に御加護を求めつつ、村人を参集させては守護神への崇敬を説いて、ムラの安寧を誓い宣言したことであろう。

濁川館は、「烏帽子(えぼし)山」の第二秀峰の尾根に在って、新遠部沢の山道(旧津軽街道)がよく見える。正面には茅(かや)刈り場の緩やかな丘陵が眺望され、「摺野」(すりの)と呼ばれていた。丘陵の端に祠堂を祭り「摺野大明神」の由縁と伝えている。

時を経て、戊辰戦争における津軽勢の大義なき襲撃で、濁川集落が焼き討ちされた事件がある。焼け残つたのは、「摺白野神社」と建築未完の民戸3軒だけで、他の民戸は全焼と伝えられている。津軽勢はなぜ、神社を焼き討ちしなかったのか?。祭神「金剛夜叉明王」の神霊は、本来「悪人を食らう」魔神である。津軽勢がこれを知り、後の天罰を恐れていたという。傲岸不遜(ごうがんふそん)の後、若木立集落にて濁酒(どぶろく)の宴を張り、災禍に遭った側にただただ「積年の憎悪だけ残す」津軽勢の狡猾(こうかつ)な行為を知る事件であつた。

『新編小坂町史』の編さんで

資料編第一集

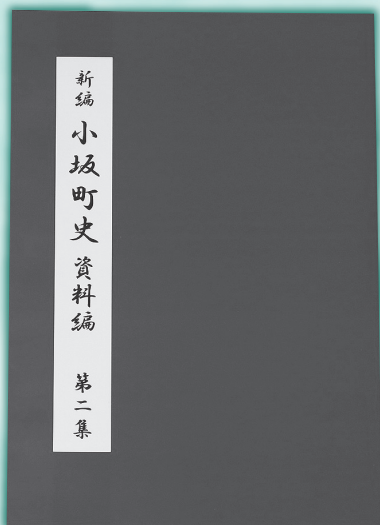
を発行

町では、『新編小坂町史』の編さんに併せて、古文書などの文書資料を収録した資料編の編集も進めています。このたびその第二集が発行されましたので紹介します。

『資料編第一集』は、昨年発行の第一集に引き続き、町が所蔵し解読済みの古文書の中から、藩政時代の御境古人(おさかいこにん・藩と藩の境を見守る係員)の業務日誌であつた『御境御用留(おさかいごようどめ)』を収録したものです。この御境古人を務めていたの

は、中小路の館で知られる旧小坂村の工藤家。第二集では、宝暦十一年(一七六一)から宝暦十三年までの日誌が選定され収録されました。

資料編は、郷土の歴史の調査や研究に役立てるために活字化されたものです。研究用なので読むには難解ですが、貴重な資料となります。第二集では、読み方の解説も加えられました。希望者には、町史編さん室で、一冊一九〇〇円でお分けいたします。第一集も一冊一六〇〇円で在庫があります。



『資料編第二集』

■お問い合わせ先
町史編さん室(TEL29-4133)